

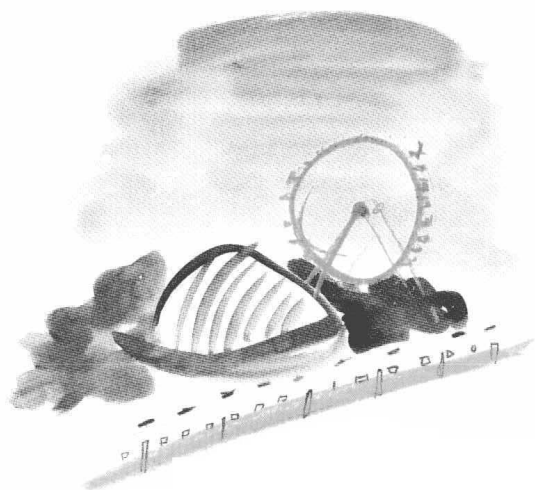
会 秋て

鎌田敏夫



会いたくて

鎌田敏夫



立風書房

著者略歴

徳島県出身、早大卒。

シナリオ研究所を出て、井手俊郎氏に師事。

主な作品「俺たちの旅」「俺たちの朝」「土曜ドラマ・十字路」「ちょっと、マイウェイ」「里見八犬伝」「金曜日の妻たちへⅠ、Ⅱ、Ⅲ」「男女7人夏物語」「女と女・華やかな春」「男たちによろしく」「男女7人秋物語」「いこかもどろか」「ニューヨーク恋物語」「太陽にほえろ! 傑作選 ボス」他

会いたくて



1989年9月5日 第1刷発行

定価 1,200円
(本体 1,165円)

会いたくて

著者 鎌田敏夫

発行者 鎌倉 豊

編集者 小野 至

発行所 株式会社立風書房

〒一四一

東京都品川区東五反田三の六の一八

電話(〇三)四四七一一一九一

振替東京五―七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

© 1989 T. KAMATA Printed in Japan
ISBN4-651-18508-8 C0095

乱丁本・落丁本はお取替します

人は、自分の人生だけを生きているのではない。

親の人生を、そのまた親の人生を、どこかに背負いながら生きている。

会いたくて 目次

第一章	逃走の母	7
第二章	女の意地	39
第三章	最後の電話	69
第四章	生きる限界	99
第五章	母と娘	131
第六章	お母さん!!	161
あとがき		194

装 装
幀 画

村上みどり
安彦勝博

主な登場人物

戸田 有紀 二十歳

二十年前、母親に捨てられ、高校卒業まで養護施設で育つ。現在は東京・水道橋近くの印刷工場で働いている。

戸田 郷子 四十五歳

人生の瀬戸際まで追いつめられて、組織から逃れるため、東京中を逃げまわっている女。

村上 七重 二十歳

有紀と同じ養護施設で育つ。現在も有紀のルーム・メイト。

北 一義 四十歳

戸田郷子を追う組織の男。

武井 幹世 三十六歳

北一義の配下。

磯田 修 二十歳

戸田郷子が住んでいたマンション近くのフランス料理店で修業中の青年。

おことわり

テレビドラマは制作進行上、流動的な要素があるため、この原作シナリオは、放映されたテレビドラマと多少違いがあります。

第一章 逃走の母

東京ドーム（夜）

ワッと歓声が上がって、外野を抜けていく白球。
スタンドが興奮で盛り上がる。

スタンド（夜）

満員の観客の中を、販売ケースを肩から下げて、
ビールを売って歩く有紀。

有紀「ビール、いかがですか！ 冷たいビール、い
がでしよう！」

制服姿に制帽を被って、大声を張り上げる有紀。

街（夜）

男のような恰好で働いている有紀とは対照的に、
フレアーのひろがったスカートをはいた七重が、
ウィンドウショッピングをしながら、ぶらぶらと
歩いている。

ショウウィンドウの中に、ちょっといいワンピー
スが吊るしてあって、七重は、足を止めて見る。

東京ドーム（夜）

有紀が働いている。

有紀「ビール、いかがですか！ 冷たいビール、い
がでしよう！」

汗を流しながら、ビールを売って歩く有紀。

ブティック（夜）

七重が、カードを出して、ウィンドウの中にあっ
たワンピースを買っている。店員が会計に行っ
ている間に、手元にあったブラウスを、さっと紙袋
に入れてしまう。

東京ドーム・ビール集配所（夜）

販売員でよかったがえしているカウンターで、有紀
が、売り上げたビールを新しいビールと交換して
いる。

汗を拭く有紀。

交換し終わると、箱を抱えて、またスタンドに走
っていく有紀。

坂道（夜）

七重が、ふらりふらりと帰ってくる。

猫がいる。

七重「おう！」

猫、逃げていってしまふ。

七重、猫を追いかける。

忙しく働いている有紀と違って、こっちはとまないのである。

東京ドーム・事務所（夜）

有紀が、自分のカードを出して、売上金の精算をしている。

カードを差し込んだ機械に、売上金の集計が出る。

係員「九百円、マイナスだよ！」

有紀「おつまみ、三ヶ、抜かれたんです、外野席で

……」

歩合の金をもらって、

有紀「お疲れさまでした！」

と、元氣よく言って、出ていく。

街（夜）

ガランとした大通りを、野球帽を被って、男の子のような恰好をした有紀が、自転車で走っていく。車の通りの少なくなった道で、勢いよく自転車をこいでいく有紀。

アパート（夜）

七重が、買ってきたワンピースを着てみている。洋服タンスの扉の裏についた鏡に写してみる七重。

七重「似合う！」

坂道（夜）

有紀が、頑張って、自転車をこいでいく。

アパート（夜）

七重が、ブラウスを着てみている。

七重「（鏡に映して）何を着ても似合う、七重ちゃん

は！」

アパートの前（夜）

有紀が、自転車を停める。

アパート（夜）

自転車の音がする。

七重、慌ててブラウスを脱ぐ。

ボタンがなかなか取れない。

慌てる七重。

アパートの廊下（夜）

有紀が帰ってくる。

アパート（夜）

七重が、慌ててブラウスを脱いで、ワンピースと一緒に押入の中に放り込む。

下着だけの姿になってしまつて、ジーンズを探してはく。

ドアが開く。

有紀が帰ってくる。

有紀「ただいま！」

七重、慌てているので、ジーンズをはきかけて、ひっくり返る。

有紀「何してるのよ？」

七重「お帰り」

有紀「（ジーンズをはきかけの七重を見て、改めて）何してるのよ？」

七重「ジーンズはいてるのよ」

ふと見ると、押入の襖にワンピースがはさまれている。

七重「……」

有紀「今帰ってきたの？」

七重「そう……」

有紀「ああ、お腹すいた」

と、流しのところについて、買物袋の中から、中華麺や野菜を出す。

七重、そのスキに、ワンピースを押し込もうとする。

有紀「ゴハン、食べた？」

第一章 逃走の母

七重「何!? (耳にはいらなかった)」

有紀「ゴハン!」

七重、やっと押し込む。

七重「食べた……」

やっと落ち着いて、悠々とシャツを着る。

有紀、野菜を切る。

七重「好きだね、あんた、ヤキソバ」

有紀「いいじゃないの」

勢いのいい音を立てながら、野菜を炒めはじめ
る。

有紀「今頃まで、何やってたのよ?」

七重「うん?……残業」

有紀「(炒めながら) 何の?」

七重「何のって、シヨウの……」

有紀「何のシヨウ?」

七重「(有紀の聞き方がしつっこいので、シロツと見るが) ハイテクシヨウ……会社に戻ったらさ、いろいろ言われて……」

有紀「誰に?」

七重「誰にって、先輩に……」

有紀「何て、先輩?」

七重「(有紀の聞き方があんまりしつっこいので、頭にくる) 会社であったことを、あんたに全部報告しなきゃならないの!」

有紀、鍋の中にヤキソバを叩き込む。

有紀「会社になんか行っていないじゃないの、七重!」

七重「(いきなり言われて)……」

有紀「今日、電話したのよ。したら、(電話の真似して) 村上七重さんは、四日前にお辞めになりました!」

怒ったように、ヤキソバをかきまわす。

七重「いろいろあったのよ……」

有紀「何がいろいろあったのよ?」

七重「だってね!……私は、時給千円なのに、時給二万円も取ってるやつがいるんだよ、あったまくるじゃないの!」

有紀「あったり前じゃないの、そんなこと!……ただ突っ立ってるやつと、ちゃんと製品の説明が出来る人では、コンビニオンのギャラが違うの初めから分かってるじゃないの!」

ヤキソバに胡椒を入れる。

七重に向かって怒りながらドンドン入れる。

有紀「勉強して、自分もそうなるって、あなた言ってたじゃないの！」

七重「(ふざけて)すみません」

有紀「あんたは、何をやっても長続きしないのよ。すぐイヤになって、何か理由を見つけては、辞める口実にするのよ！」

と、ドンドン入れる。

七重「そんなに入れると辛いよ」

有紀「……(入れ過ぎたことに気づくが)辛くしたのよ」

七重「あらま、意地張って」

有紀「あなたがいいかげんなことばかりしてるから、私が、夜も昼も働かなきゃならないんじゃないの！」

七重「別に頼んだわけじゃないわよ」

有紀「働かないと、ここの家賃だって払えないじゃないの」

と、ヤキソバを皿に入れてくる。

途中の電話につまずきそうになる。

有紀「お金もないのに、電話なんか引いて……」

七里「いま時ね、電話のない人はいないの」

有紀「誰が電話なんかしてくるのよ」

七重「彼がかけるって言ったの」

有紀「電話がつく前に、振られたくせに」

七重「……」

有紀「かけるところもないじゃないの、私たちには

……(シンミリとした言い方になる)」

七重「……(ふっと淋しい表情になる)」

有紀「……ヤキソバを食べはじめる。」

七重「辛いでしょ？」

有紀「(本当は辛いのだが)辛くなんかないわよ」

七重「意地張って……(辛いのを知っている)」

有紀「全然辛い(と、我慢して食べる)」

七重「(そんな有紀を見ながら)お母さんに会いにいかないの？」

有紀「(急に言われて)え……？」

七重「お母さんの居所、分かったんでしょ？」

有紀「……(見る)」

第一章 逃走の母

七重「どうして行かないのよ」

有紀「……（七重を見ている）」

七重「そこらへんに手紙置いとくから、見ちゃったのよ（言い訳する）」

有紀、立っていつて引出しを開ける。

引出しの奥に、手紙が入っている。

有紀「引出し開けて、人の手紙盗み見て……」

七重「（平気な顔で）三ヶ月になるじゃない、それ、来てから」

有紀「……」

七重「会いにいかないの？ せっかく、園長さんが知らせてくれたのに」

有紀「会いたくなんかないわよ」

と、またヤキソバを食べはじめ。

有紀「いまさら会ったって仕方ないの」

七重「どんなお母さんか知らないんでしょ、有紀？」

有紀「……」

七重「知りたくないの？」

有紀「知りたくない」

七重「意地張って」

有紀「……」

七重「辛いでしょ？」

有紀「辛くなんかないわよ」

七重「意地っぱり！」

有紀「仕事、探しなさいね、明日から」

七重「探すわよ……さあ、もう寝よ」

と、押入を開けて、布団を出そうとする。

押入の下に、ワンピースが突っ込んであるのが見える。

有紀、行く。

七重「……（まずいという顔）」

有紀、ワンピースを出す。

ブラウスも一緒に出てくる。

有紀「どうしたのよ、これ？」

七重「買ったのよ」

有紀「そんなお金あったの？」

七重「あったわよ」

有紀、七重のバッグを開ける。

七重「人のバッグ、勝手に開けないでよ」

有紀「人の手紙、勝手に見たんじゃないの」

と、財布を出す。

カードと一緒に、カードのレシートが出てくる。

有紀「二万一千円もしたの、これ？」

七重「……」

ブラウスがレシートについていない。

有紀「どうしたのよ、これ？」

七重「……」

有紀「ついてないじゃないの」

七重「……」

有紀、猛烈に腹が立ってきて、立っている七重を、足ばらいでひっくり返す。

七重、のそのそと立ち上がる。

有紀「園えんにいる時と違うのよ、もう！ 園えんにいる時はね、お母さんが会いにこない子だから、お父さんが会いにこない子だからって、多少のことをしても、みんな、大目に見てくれたのよ……でも、今、そんなことをすると誰も相手にしてくれなくなるんだよ！」

七重「ああ、そうかい、そうかい」

有紀、腹が立って、もう一度足ばらいをくわせる。

七重、また尻餅をつく。

有紀、猛烈に腹が立ってきて、立ち上がった七重を、さらにもう一度足ばらいにする。

七重、またひっくり返る。

七重「（ひっくり返ったままで）私はね、あんたとは違うんだよ……と、（小さい声で言う）」

有紀「（よく聞こえない）何よ……」

七重「（居直ったように大声を出す）赤ん坊の時に親に捨てられても、頑張って立派に生きていける人間とはね、私は違うんだよ！」

有紀「違ったら、どうだって言うのよ！」

七重「……」

有紀「……」

二人、にらみ合う。

有紀、鋏を持ってきて、七重のカードを切ってしまう。

有紀「あなたの尻拭いするの、もう沢山だからね」

七重「尻拭いしてなんて頼んでないじゃないの！」

有紀「誰がしてくれるのよ！」

七重「私のお尻ぐらい、自分で拭きます……ウオシユ